

# 『茶の文化史—英国初期文献集成—』 日本語解説（前半）

滝口 明子（大東文化大学国際関係学部）

## *A Collection of Early English Books on Tea: Notes in Japanese (Part I)*

Akiko TAKIGUCHI

『茶の文化史—英国初期文献集成—』（2004：ユーリカ・プレス）は、ヨーロッパへの茶の輸入が始まってからおよそ 200 年間に英国で出版された茶書を集成し復刻したものである。本稿はこの文献集に添えた別冊日本語解説を研究資料として、再録公刊するものの前半部分である。この日本語解説は、英国初期文献集を繙く読者のために、ヨーロッパにおける茶の歴史とその研究の大きな流れを略述し、収録した各文献とその著者について解説している。その学術的意義を鑑み、出版社からの許諾も得て、研究資料として公開することにした。部分的に字句の修正を施したが、内容はほぼ原文のままとなっている。今後の茶の文化史研究の基礎資料の一つとして役立つことを祈念する。

### 1) ヨーロッパにおける茶の歴史とその研究について

17 世紀初めから現在まで、ヨーロッパにおける茶の歴史は 400 年を迎えようとしている。その起点のひとつとして重要なのはオランダ東インド会社の船が日本と中国の茶を持ち帰った 1610 年とされている。<sup>(1)</sup> 1610 年以前にも、オランダ船による茶の輸入があったという説<sup>(2)</sup> やポルトガル

<sup>(1)</sup> 角山榮氏の最近の説によれば、オランダ東インド会社のローデ・レーウメット号 Roode Leeuwmet 号 200 トンは 1609 年 10 月 2 日に日本の平戸を出港し、途中パタニ（10 月 29 日 -11 月 21 日）、バンタム（11 月 30 日 -1610 年 1 月 10 日）に寄港し、1610 年 7 月 20 日にオランダから帰着した。（W.Z.Mulder, *Hollanders in Hirado, 1597-1641*, Haarlew,n.d.）日本茶を平戸で、中国人がもたらした中国茶をバンタムで積み込んだとされている。ただそれがそれがどのような茶だったか、に関しては十分な資料がなく、角山氏は「日本からは主に抹茶、中国茶としては釜炒り茶が中心で、その他抹茶茶碗、茶托といった茶の道具も同時に送られたであろう。」と推測している。（角山、2003、14 頁）日本の抹茶が輸入されたかどうかやどのように用いられたかについては、まだ不明な点も多く、ヨーロッパと日本双方の史料の収集と解説が待たれる。

<sup>(2)</sup> 前掲、角山論文および以下を参照。松崎芳郎『年表 茶の世界史』（八坂書房、1985 年）、荒木安正、松田昌夫『紅茶の事典』（柴田書店、2002 年）

やイタリアなどで茶が飲まれていたらしい記録はあるが<sup>(3)</sup>、いずれにせよ茶の本格的な輸入は17世紀初め頃からと考えてよい。

17世紀初頭にはコーヒーもイスラム圏からヨーロッパにもたらされ、初めはイエメンのモカから輸入されていた。<sup>(4)</sup> その他の嗜好品としては、すでにコロンブスの航海以降、16世紀には新大陸からタバコとココアがヨーロッパに入ってきており、ココアはスペインやフランスなどの宮廷を中心に人気の飲み物になっていた。<sup>(5)</sup>

17世紀、18世紀のヨーロッパでは新しい外来の飲み物・嗜好品として、この4つ、すなわちタバコ、ココア、茶、コーヒーを組み合わせる本も多くあらわれている。『初期文献集』の文書2や文書13もその一例といえる。茶の文化史をみてゆく場合も、茶だけでなく、これらの新しい飲み物相互の関係や、古くからヨーロッパで親しまれてきたワイン、ビール、エールなどの酒類との関係に目を向ける必要がある。とくに酒に関しては、節酒、禁酒の際の代用飲料としてカフェインを含むココア、茶、コーヒーなどの新しい飲み物が普及したという側面も見落としてはならない。

大航海時代以降、世界各地からもたらされた多くの物産はヨーロッパの生活や産業に大きな影響を及ぼし、やがてヨーロッパの拡大とともに世界の諸地域の生活をも変化させた。例えば新大陸からもたらされた新しい作物、ジャガイモやとうがらし、トマトなどがヨーロッパをはじめ世界の諸地域の農業や食生活を大きく変化させたことは広く知られている。茶もアジアからヨーロッパへ伝来し、やがて「世界の飲み物」となった。16世紀以降、ものと文化の世界的な交流が活発化したとすれば、茶もその大きな流れにのって世界史に登場した飲み物なのであり、世界経済や各地の生活文化に大きな影響を及ぼした物産の代表的なものと言うことができる。

茶はアジアの人々にとっては古くから親しまれてきた日常の飲み物であった。しかし17世紀のヨーロッパでは、全く馴染みのない不思議な飲み物だった。人々はこの飲み物に、その産地であるアジアの国々、とくに中国や日本のイメージを重ね合わせて、賞賛したり、警戒感を示したり、あるいは非難したりした。非難はヨーロッパの富と健康を損なうという議論、つまり経済と医学に関するものが中心だった。後述するとおり『初期文献集』には賛否両論、その実例が豊富に含まれている。

茶の流行と普及の過程は、イギリスではかなり急速に進み、劇的と言ってよいほどのものだった。1660年代から中・上流市民に飲まれ始め、18世紀の間に爆発的に流行し、消費量を伸ばした。18世紀末には国民のあらゆる層から「日常生活の必需品」と呼ばれるほどになる。19世紀半ばに植民地インドやスリランカにおける茶の生産が軌道に乗ると、茶は自国領で生産できる国民飲料となり、「午後のお茶」の習慣もいっそう定着した。19世紀から20世紀にかけて、茶の文化はイギリス独自の伝統文化として成長し大切に受け継がれてきた。ブロンテ姉妹やディケンズなど、多くの小説にも描かれ、イギリスの生活の一部となって今に至っている。平和なときも戦争の際も、イギ

<sup>(3)</sup> 例えば、D.F.Lach,1977,1994,p.231 参照。

<sup>(4)</sup> Chaudhuri,1985,p.31 参照。

<sup>(5)</sup> ヴォルフガング・シヴェルプシュ著、福本義憲訳『楽園・味覚・理性—嗜好品の歴史』(法政大学出版局、1988年)、上野堅實『タバコの歴史』(大修館書店、1998年)などを参照。

リス人にとって茶がいかに大切な飲み物であったか、多くの記録が残っている。

『初期文献集』に記録された文書は、この400年間におよぶ流行と定着の過程の前半に書かれたものであり、茶をめぐる一般の人々の疑問や不安に答えようとしたもの、学問的研究成果の発表、茶の効用や用法に関する実用書など、さまざまなジャンルのものが含まれている。各文書が出版された時代背景や内容については、次の第二節で述べる。

茶の研究全般に関して、20世紀前半のユーカーズ『茶のすべて』Ukers, 1935は今も茶の研究の古典とされており、1970-80年代日本の『茶の文化—その総合的研究』（1981）および角山榮『茶の世界史』（1980）はわが国における茶の研究の草分けとして重要である。また茶の研究学会として茶の湯文化学会が1994年に設立され、日本の茶道だけでなく中国茶や紅茶も含めた「茶学」の研究の場として活動を続けており、学会誌『茶の湯文化学』も刊行している。静岡県も茶文化振興協会などをとおして『茶の文化』や『緑茶通信』などの学術情報誌を定期的に刊行し、国際 O-CHA 学術会議（2001、2004）を開催している。紅茶に関しては日本紅茶協会が定期的に研究会を開催し、『紅茶会報』を出すとともに、英語の茶書の翻訳などもおこなっている。

イギリスをはじめ欧米諸国でも、茶の研究は主として医者、茶業関係者、茶の愛好者などによって進められてきた。例えば、前述のユーカーズの著作もアメリカのコーヒー・茶業界の支援がその基盤にあったからこそ実現した仕事であるといえる。ユーカーズのフィールドワークの対象となった「茶の国々」のひとつ、日本でも茶業関係者はユーカーズを大歓迎し、資料収集に協力したとされている。<sup>6)</sup>

茶の貿易史に関しては、Glamann, 1958、Dermigny, 1964、Chaudhuri, 1978 および 1985 などが詳しく、古典的な研究とされている。Chaudhuri, 1978 および 1985 は日本でも広く読まれ、Dermigny, 1964 については、フランスの Braudel, 1979 や Butel, 1989 なども基礎文献として参照している。また中国の茶貿易に関しては濱下、2000 がある。

茶の価格と輸入量の変化については、Chaudhuri, 1978 の付表を見ると、17世紀後半から18世紀後半にかけてのイギリス東インド会社による貿易の実態や変化がよくわかる。イギリス東インド会社の中国貿易では、1717年頃、茶が絹に代わって首位を占め、さらに18世紀後半には茶が80パーセントを占めるほどになった。<sup>7)</sup> また1784年の帰正法 Commutation Act までは、イギリスでは茶に対する関税が高かったため、密輸 smuggling が横行していた。政府が課す高過ぎる茶税に反発し、密輸商人に対する親しみを込めた言葉を日記に残している人もいる。イギリスへの茶の密輸は儲かる商売だったので、フランス、オランダ、デンマーク、スウェーデンなどの東インド会社の商人たちも、競って茶をイギリスへ再輸出（密輸）していた。茶税や密輸の問題に関しては、『初期文献集』の文書16、18、19などでも触れられている。

<sup>6)</sup> 『茶業界』第19巻3号、大正13年、第20巻3号および10号、大正14年参照。ユーカーズは、大正13年5月と翌14年2月に来日して各地で大歓迎を受けており、日本茶のアメリカへの輸出増大策などについても提言している。この資料については元お茶の郷博物館長で茶学の会代表の小泊重洋氏の御教示を得た。

<sup>7)</sup> 浅田、1985、103頁。

茶がヨーロッパ、なかでもイギリスの生活に定着してゆく過程については、さまざまな研究がある。<sup>(8)</sup> 茶は男性たちの社交の場だったコーヒーハウスを中心に流行したコーヒーに比べて、家庭の女性たちにも好まれ、酒類とは異なり男女一緒に楽しめる飲み物として人気を博した。もちろん茶とコーヒーはともにコーヒーハウスでも家庭でも親しまれる飲み物となったが、茶=女性というイメージは、『初期文献集』の茶詩などにも明らかなおと、流行の初期から顕著に見られる。

最近の研究としては、茶をはじめとする奢侈品の消費と文明化の問題に注目した Smith,2002、インドやネパールでの経験をもとに、イギリスと日本の資本主義社会誕生過程の解明に取組み、それぞれの国で茶の果たした役割についても関心の深い Macfarlane,1997,2003、大英帝国の形成に茶が果たした役割を重視している Ferguson,2003、アジアからの綿製品や茶とも関連の深い陶磁器などの奢侈品・輸入品がイギリスの国内産業に刺激や影響を与え、産業革命にもつながったとして、アジアのヨーロッパへの影響を見直している Berg,2004 などがある。

近代ヨーロッパの形成に大きな影響を与えたものとして、今後ますますこの「アジア産のハーブ」は注目を集めることだろう。そして、ヨーロッパにおける「アジア産のハーブ」の歴史をたどろうとする人は、この『初期文献集』の中にさまざまな手掛かりを見つけることができるにちがいない。ここに集められた茶論や茶詩をとおして、ヨーロッパがこの新しい飲み物をどのようにとらえ、どのような態度を取ったかが見えてくるだろう。さらにヨーロッパで形成された茶の文化と、中国や韓国、日本やタイ、ミャンマーなどアジア各地で受け継がれてきた茶の文化を比較してみれば、共通点もあり相違点もあって、茶はそれぞれの文化の特質を映し出す鏡となっていることにも気付かされる。

茶に関する研究は、貿易、経済政策、農業、食生活、医薬思想、宗教、芸術などさまざまな要素が関係している。茶という飲み物そのものや対象地域についての詳細な個別研究とともに、物産の流れを巨視的にとらえる視点を持ち続けることも不可欠となる。そのためにも、茶に関する多様な分野の文献を集めたこの『初期文献集』から学ぶことは多い。

<sup>(8)</sup> Bramah, 1972, Forrest, 1973, Scott, 1964, Burgess ed., 1992, Pettigrew, 2001, および前出注5) のシヴェルプシュ、1988や滝口、1996などを参照。

2) 『初期文献集』に含まれる著作とその著者について—内容と解題—

『初期文献集』所収 22 文書 一覧

- 文書 1 不詳 [CHAMBERLAYNE], 1682  
コーヒー・茶・ココア・タバコ論
- 文書 2 DUFOUR [英訳 CHAMBERLAYNE], 1685 (原本は 1671?)  
コーヒー・茶・ココア論
- 文書 3 OVINGTON, 1699 茶論
- 文書 4 TATE, 1702 詩
- 文書 5 不詳, 1722 茶論 (効用と弊害)
- 文書 6 KAEMPFER [英訳 SCHEUCHZER], 1727 (原本は 1712?)  
日本の茶
- 文書 7 SHORT, 1730 茶論
- 文書 8 CAMPBELL, 1735 詩
- 文書 9 WRITING-MASTER, J. B., 1736 詩
- 文書 10 不詳, 1743 詩
- 文書 11 MASON, 1745 効用と弊害、医学的茶論
- 文書 12 SURGEON, J.N., 1745 MASON 批判
- 文書 13 PAULLI [英訳 JAMES], 1746 (原本は 1665?)  
タバコ・茶論
- 文書 14 WESLEY, 1749 友への手紙 (断茶法)
- 文書 15 SHORT, 1750 茶論 (商業、医学)
- 文書 16 HANWAY, 1756 反茶論
- 文書 16' SAMUEL JOHNSON, 1757 HANWAY の本の書評
- 文書 17 LETTSOM, 1772 初版 茶論 (植物学、医学)
- 文書 18 TWINING, 1784 茶税・茶貿易
- 文書 19 TWINING, 1784 茶税・茶貿易
- 文書 20 A FRIEND TO THE PUBLIC, 1785 茶の選び方
- 文書 21 McCALMAN, 1787  
茶論 (自然学、商業、医学、東インド会社、スコットランド)
- 文書 22 LETTSOM, 1799 第 2 版 茶論 (植物学、医学)



- 文書1 Anon. [Chamberlayne, John, 1666-1723]  
*The natural history of coffee, thee, chocolate, tobacco* (1682)  
著者不詳 [ジョン・チェンバレン]  
「コーヒー、茶、ココア、タバコの博物誌」

17世紀はじめの輸入開始以後、茶がヨーロッパ諸国で普及し始めるのは1660年代頃からと考えられている。王政復古期を迎えたイギリスでもこの頃からコーヒーハウスで出される茶やコーヒーに税金がかけられるようになった。課税対象品目のひとつとなったことは、一般化のひとつの目安と言えるだろう。

ヨーロッパにおける茶の普及をうながし、最も有名な茶の礼賛者として知られているのは、オランダの医学博士コルネリウス・ボンテクー (Cornelis Bontekoe, 1647-1685) である。ボンテクーはオランダ語で『茶—この優れた薬草について』(1678) など茶の効用を述べた数冊の本を出している。<sup>(9)</sup> それ以前にオランダでは、レンブラントが描いた解剖学講義の絵で知られる医学博士ニコラス・テュルプ (Nicolas Tulp, 1593-1674) の『医学論』(1641) がラテン語で出ており、その中でテュルプは茶を賞賛している。そのほか17世紀前半の茶書としては、後述する文書13の原著者シモン・パウリ (Simon Paulli, 1603-1680) の本(1635) が重要で、まだまとまった茶論がほとんどない時代に広く読まれた。この文書1においても、テュルプやパウリの本がしばしば引用されている。

さらにさかのぼって16世紀から17世紀初頭、ヨーロッパにおけるごく初期の茶に関する情報源は、アジアへの航海記や旅行記およびイエズス会宣教師の手紙だった。これらに関しては、矢沢利彦氏の研究(1989, 1997) や拙訳、レットサム『茶の博物誌』(講談社学術文庫, 2002) の文献表を参照されたい。なおレットサムの『茶の博物誌』の原本は、1772年の初版、1799年の第二版ともにそれぞれ文書17、文書22として『初期文献集』に収録されている。

チェンバレンはロンドン生まれの作家、翻訳家で、DNBによれば、オックスフォード大学で学び、さらに1688年にはオランダに渡ってライデン大学学生となり、近代諸語を学んで16カ国語をおさめたという。帰国後さまざまな役職に就き、1702年には王立協会 Royal Society の会員(フェロー) に選ばれている。王立協会はイギリスおよびヨーロッパで当代一流の学者が集う研究者の協会で、その会員として認められるのは非常に名誉なことであった。また、キリスト教知識普及協会 Society for the Propagation of Christian Knowledge の会員でもあり、聖書やキリスト教に関する啓蒙書も残している。チェンバレンの主著は、オランダ語からの翻訳書、ブランド著『低地諸国オランダ、フランドルにおける宗教改革の歴史』Brandt, *History of the Reformation in the Low Countries*, 4vols. 1720-3. であるとされている。

文書1はその標題のとおり、医者や近代の旅行者たちの文献に基づくコーヒー、茶、ココア、タバコについてのコンパクトな入門書になっている。ページ数は少ないがよくまとまっていて、この

<sup>(9)</sup> Cornelis Bontekoe, *Tractaat van het excellenste Kryud Thee*, Hague 1678.

本が出た 1680 年代までにヨーロッパの読書階級が手にすることのできた中近東、東アジア、アメリカに関する文献を最大限に利用しながら、これらの新しい飲み物の原産地での利用法やその医学的効用あるいは弊害について整理している。

例えば、茶に関しては、ボンティウス Bontius、シモン・パウリ、トリゴティウス Trigautius、オレアリウス Olearius、アレクサンドル・ド・ロード de Rhodes の著作やキルヒャーの『支那図説』、ヴァレニウスの『日本』などを参考にし、傍註の形でそれぞれの文献の参照個所の頁数まで記載している。つまりこの本は今日の学術論文のような体裁をとっているため、これから逆に 17 世紀後半までにヨーロッパに伝えられていた東洋に関する知識の源泉へと遡ることもできる。

●文書 2 Dufour, Sylvestre, 1622-1685

*The manner of making coffee, tea, and chocolate* (1685)

シルヴェストル・デュフル著、ジョン・チェンバレン訳

「コーヒー、茶、ココア—ヨーロッパ、アジア、アフリカ、アメリカでの一般的な使用法とその効用について」

文書 2 は前述のジョン・チェンバレンが編集、翻訳したコーヒー、茶、ココア論で、オックスフォード大学マートン・カレッジの学寮長トーマス・クレイトン卿に献呈されている。まだ若いチェンバレンの初期の仕事で、DNB によれば出版当時から面白くて人気があり、広く読まれた本だったらしい。

コーヒーと茶に関しては 1671 年に出たデュフルのフランス語の本を、ココアに関してはスペインの医者アントーニオ・コルメネロの本をもとにしている。ココアに関しては詳述しないが、文書 2 のココア論の表紙に内容紹介がある。チョコレートとは何か、カカオ豆の成分とそれに由来する飲み物の性質、チョコレートの作り方と飲み方、どんな人がどんな時に飲むと良いかなどとなっている。著者に関しては以下のような記述がある。

(Antonio Colmenero de Ledesma, a *Spaniard, Physician and Chyrurgion of the City of Ecija in Andalusia*)

フランス語原本の著者デュフルは、フランスの貿易商人で 3 冊の著書を残しており、そのうち 2 冊は、1671 年と 1685 年に出版されたコーヒー、茶、ココア論で、1685 年の本は前著を加筆修正したものとされている。ヨーロッパ諸国で広く読まれた本で、前述のレットサム『茶の博物誌』の文献表にも文献 (35) にデュフルのものが取り上げられている。[レットサム、2002、219 頁]

デュフルは南フランス、プロヴァンス地方のマノスクに生まれ、マルセイユで育った。文学に関心が深かったが、薬品を扱う商人になり、リヨンへ出て、同じカルヴァン派の友人達と協力してペルシャやエジプトのカイロなどと古美術品の交易に携わった。新教徒の信仰の自由を保障したナントの勅令廃止の少し前にフランスからスイスのジュネーヴへ逃れ、1685 年 9 月に同じレマン湖畔の町ヴェヴェイに移り住んだが、同年その町で亡くなっている。[滝口、1996、41 頁]

文書2の序文によれば、コーヒーに関する部分は「非常に学識ある」ドイツ人医師がラテン語で著したものをデュフルが仏訳し、それをチェンバレンが英訳したという。ただしこのドイツ人医師が誰であるかは不明で、今後の解明が待たれる。茶に関する原資料としては、オランダ東インド会社の中国皇帝への使節の報告書、ロード神父の旅行記、オランダの医学博士テュルプの著作などが上げられている。

文書2の序文の最後には次のような一節がある。

I am perswaded that this little Collection will be well accepted by all good men, who shall thereby be enabled to understand what excellent Vertues the Creator has destributed lo these three foreign Drugs : Which shall so much the more oblige them to admire and bless the Sovereign Author of all these Creatures, and shall render them the more desirous to make good use thereof, with continual Thanksgiving, in all the Distempers wherewith they shall find themselves either threatned, or really afflicted.

コーヒー、茶、ココアを「3つの外来の薬 (Drugs)」という言葉でとらえていること、そして優れた性質・薬効 (excellent Vertues) をこれらの飲み物に与えて下された創造主への感謝の言葉が重ねられていることに注目しておきたい。1685年以前に出版された本の中にも、すでにこの3つの外来の新しい飲み物に対して警戒感を示し、反対論を主張するものもあった。例えば、後述する文書13 (シモン・パウリ著、原本1635年、1665年) は特にタバコの弊害を強調し、茶に関しても、できればヨーロッパ産のハーブを用いることを勧める立場をとっている。それらに比べると、文書2は新しい3つの飲み物に対して肯定的好意的な立場から書かれたものであることがわかる。

1685年当時広く読まれたことから、このあとのコーヒー、茶、ココアの流行に大きな影響を与えた本であり、茶の文化史研究においても非常に重要な文書である。デュフルの2冊の本(1671年、1685年) との比較検討も今後の課題のひとつとなるだろう。

●文書3 Ovington, John

*An essay upon the nature and qualities of tea* (1699)

ジョン・オーヴィントン

「茶の本質と諸性質について一茶の生育地の土壌と気候、茶の種類、選び方、保存法、効用」

文書3は文書1と同様、新しく流行し始めていた茶について、その植物として、また飲み物としての諸性質を紹介することをねらいとしている。内容は標題にあるとおり、茶樹についての記述、茶の種類、飲み方、選び方、保存法、効用などから構成されている。当時の読者たちに必要とされていた茶に関する知識が、少ない頁数の中に要領良くまとまっている。文体も明快で、とても分かりやすい、すっきりした著作という印象を受ける。

著者のオーヴィントンは、インドのスラトへの旅行記 (*A Voyage to Surat in the Year 1689*) で



も広く知られる人物で、宮廷付き牧師でもあった。献辞には、茶を pleasant（美味しく心地よい、楽しませてくれる、気持ちのよいもの）でありかつ medicinal（医薬としての効果がある、身体に良いもの）であるという言葉がみられ、茶を「美味しい薬」ととらえる考え方が表明されている。同様の考え方は、すでに文書2のデュフルなどでも顕著にあらわれている。

オーヴィントンは茶を大きく三種類に分けて、それぞれの茶葉の形状や色、さらに水色（飲み物としての茶の色）、耐泡性（何煎くらい淹れられるか）などについて詳しく書いている。文書3の9頁以下を参照しながら、その一部を次に紹介する。

茶の三種類とは、ボヒー（Bohe；Voui）、シンロ（Singlo；Soumlo）、ビン（Bing）またはインペリアル（Imperial）と呼ばれる。

第一のボヒーは黒色に近い小さな葉で、水色は褐色（brown）あるいは赤みがかっている。中国人はこのお茶を病気の治療や予防に効果があると考えている。身体の弱い人、胃の弱い人にも向いており、味は本当に品質の良いものなら、美味しい良い味（delicious and pleasant）がする。他の2種と比べ優れている点は、治癒力のある鎮痛・芳香性の性質（healing balsamick Quality）と、保存性が高く、長く保存するほどかえって品質が向上する点である。他の2種、シンロとビンは長く置いておくと劣化しやすい。[文書 3,pp.9-13]

第二のシンロには、中国では産地や製法などによって多くの種類があるが、輸入されているのは同じくらい品質の良い2種類、すなわち、細長い葉をしたものと、それより小さくて、青みがあった緑色のものである。後者の葉を噛んでみるとカリカリ（crisp）していて、噛んだ後、手に取ると緑色に見え、水色は薄緑色（pale Green）、香りは新鮮ですばらしい、生き生きした心地よい香り（fresh and fine, lively and pleasant）がする。この茶は強くて耐泡性があり、3-4回茶を淹れることができる。この種類の茶の良し悪しの決め手は、芳しい香り（fragrant Smell）と緑の色（the green Colour）と苦味があった甘い味（the bitterish sweet Taste）である。[文書 3, pp.11-12]

第三のビンまたはインペリアルの葉は大きくて巻きはゆるい。この種類の葉の最上質のものは眼に緑、口にカリガリ、香りはとてもよい香りがするので、中国でも他の二種類よりも3倍くらい値段が高く、イングランドでも高値がついている。しかし、水色は黄色や緑色などさまざまで、弱くてあまり耐泡性が無く、二煎めからは色だけで気（Spirit）が抜けているともいわれる。[文書 3, p.13]

1700年頃のイギリスにおける茶の種類を伝える興味深い個所なので、少し長く紹介した。著者はこのあとも、茶の樹は強いけれど葉はとてもデリケートなものだから、と保存法についても非常に細かい注意をしている。

文書の後半は茶の効用、どんな病気に効くか、またその仕組みについての説明が中心となっている。

最初に述べたとおり、全体として茶という飲み物を肯定的に紹介する内容になっているが、17世紀半ば頃のように、万能薬のような書き方をしているわけではなく、もっと現実的理性的にとらえていることがわかる。茶の葉を口に含んで噛んでみて比べている所なども、興味深い。砂糖についても、茶と一緒にとることがすでに一般的だったことをうかがわせる記述がある。[文書 3, p.38] まだ宮廷の貴族や高官、上流市民層を中心とした流行だったとはいえ、しだいに茶の人気が高まる

時期に、その流行を後押しした重要な茶書であると言えるだろう。

●文書4 Tate, Nahum, 1652-1715

*A poem upon tea* (1702)

ネイハム・テイト

「茶詩」

文書4は桂冠詩人ネイハム・テイトによる詩で、茶を賞賛する内容になっている。

茶は1660年の王政復古で王位についたチャールズ2世の時代に、ポルトガル出身の王妃キャサリンの影響もあり、宮廷やコーヒー・ハウスで人気の飲み物になったとされている。次のジェームズ2世を経て、1688年の名誉革命後の宮廷はオランダ出身のウィリアム王と、ジェームズ2世の娘でウィリアムの妻メアリ女王のもとにあった。ウィリアムとメアリ、そして次のアン女王（在位1702年-1714年）は、いずれも茶を愛好する君主だったとされる。このように茶を愛好する君主が続いたことは、茶がイギリスで流行し、国民の広い層に普及してゆくひとつの大きな要因になったと考えられている。

17世紀末から18世紀初めのイギリスは、近代市民社会の萌芽期ともいわれ、政治、社会上のさまざまな変化が起こりつつある時代だった。この時期、イギリスにはスウィフトやデフォー、アディソンやステールなど天才的な作家やジャーナリストがあらわれ、文学者や政治家、商人や旅行者がたむろし、語り合うコーヒー・ハウスの文化が開花した。茶もココアなどともにコーヒー・ハウスのメニューのひとつとなっていた。

テイトは少年時代をアイルランドとイングランドで過ごし、ダブリンのトリニティ・カレッジを卒業した。1676年までにはロンドンに出て、詩集を出版し、劇作家としても作品を発表し始めている。英文学史上は凡庸な詩人、シェイクスピアの『リア王』を書き直してハッピーエンドの劇にした劇作家として記憶されている。現在では文学者としての評価は決して高いとは言えないが、同時代人にはテイトの『リア王』は人気があり、出世作となった。その後150年間ほどはテイトの『リア王』の方がシェイクスピアの原作より人気があったとさえ言われている。テイトは謙虚で善良な人柄で、同時代人に敬愛され、賛美歌集改訂などにも貢献した。

1692年に桂冠詩人になってからは、詩作に専念したが、政府の公式見解を述べるスポークスマンのような詩ばかりで、現代の読者にはつまらないものばかりかもしれない。しかしその中でただひとつ例外がある。それがこの文書4の「茶詩」なのであり、テイトの詩の中で当時も好評で、今も面白く読める数少ない詩のひとつとされている。

「序文」の中でテイトは、この詩は陽気で上品なものなので、淑女たちに読んでもらうのにふさわしく、殿方にも「茶」は世界最高の健康飲料だと知らせたいと述べている。詩の内容は、女神たちのうち誰が茶の守護神になるか、それぞれが自分こそ「茶の女神」にふさわしいと主張する、というもので、後半には茶の医学的効用がまとめられている。

遊び半分、面白半分ともとれる内容だが、当時の宮廷人たちや紳士淑女たちに、茶がどのような飲み物としてとらえられていたのかを考えると、貴重なヒントを与えてくれる文献であると言える。

●文書5 Anon. [Physician]

*An essay of the nature, use, and abuse, of tea, in a letter to a lady* (1722)

著者不詳 [内科医]

「茶の特性、効用と弊害について—ある淑女への手紙—茶の作用機序についての機械論的解説付」

文書5は作者不詳だが、おそらくある内科医によって書かれた茶論で、どちらかと言えば茶の危険性を女性たちに警告する内容となっている。<sup>(10)</sup>

18世紀初めの20年間は、茶が上流市民階級の生活に急速に普及した時代である。1710年代には、有名な新聞『スペクテーター』（発行期間1711年3月1日から1714年12月20日）が「ティー・テーブルに哲学を！」をキャッチフレーズとして各家庭のティー・テーブルやコーヒー・ハウスの読者たちに語りかけた。新しい流行の飲み物が各家庭に進出し、日常の飲み物となる兆しが見える。

茶の輸入の面からみると、1713年にイギリス東インド会社は正式に広東に接近する権利を得て、1717年から中国茶の船積みを定期的に行うようになった。[浅田、1985、97頁] イギリス東インド会社の年平均茶輸入量は、1713年から1720年は30万6000ポンド、1720年代は88万ポンド、1730年代は116万ポンド、1740年代は202万ポンド、1750年代には373万ポンドとなっている。イギリス船が直接中国のアモイで買い付けた茶が初めて1699年にロンドンにもたらされたとき、その輸入量は1万3000ポンドであったから、18世紀前半の50年間にいかに茶の輸入が急増したかがわかる。<sup>(11)</sup>

文書5は標題にもあるとおり茶の効用について触れてはいるが、むしろさまざまな病気や体調不良の原因を茶に求めようとしている点に特色がある。例えば「茶の飲み過ぎ」（too plentiful Use of Tea）と言うような言い方が何度も出てきて、1720年代にはかなり茶が普及して、かつては貴重品であった茶を、「多量に」飲む人たちが出現していたことがわかる。[文書5、p.54]

文書5の推論の仕方は、現代からみると首をかしげたくなるような個所も多い。しかし、当時のさまざまな病気の症例が上げられている点や、茶と血液の問題について、血液循環論や血液とスピ

<sup>(10)</sup> 文書5の出版から3年後の1725年に出版された本は、表紙以外ほとんど文書5と同一の内容で、ページ数も一致している。おそらく同じ本の再版と推定されるが、その1725年の本の表紙には、著者は内科医となっている。参考までに1725年版の表紙の一部（標題その他）を以下にあげておく。*An Essay on the Use and Abuse of TEA. Being a mechanical account of its action upon Human Bodies. With an attempt towards adjusting the difference between perspiration and sweat. By a physician. The Second Edition. -Aconita bibuntur-fictilibus.*

<sup>(11)</sup> 浅田、1985、96頁。この時アモイで1ポンドあたり2シリング4ペンスで買った茶は、ロンドンで14シリング8ペンスで売ることができたという。1重量ポンドは、約453.6グラム。

リットの関係などとも関連させて論じようとしている点など、医薬思想や医学史の面からは興味深い文献であるといえる。

- 文書6 Kaempfer, Engelbert, 1651-1716  
*The appendix to the history of Japan* (1727)  
エンゲルベルト・ケンベル著、  
ヨーハン・C・ショイヒツァー訳  
「日本誌付録・日本の茶の話」

エンゲルベルト・ケンベルの『日本誌』(1727)は、謎につつまれた東洋の国、日本を、博物学者の眼でヨーロッパに紹介した本として広く知られている。ケンベルはドイツ出身だがオランダ商館付き医師として、1690年から92年にかけて日本に滞在した。<sup>(12)</sup> 1716年にケンベルが他界した後、未出版の原稿や貴重な収集品の多くをイギリスの医師で博物学者のスローン卿(Sir Hans Sloane, 1660-1753)が入手した。スローン卿は自分の司書をしていたスイス出身の医師ヨハン・カスパー・ショイヒツァー(1702-29)にケンベルの草稿を英訳させ、1727年に『日本誌』として出版した。これにはケンベルが生前出版していたラテン語の『廻国奇観』(1712)からも、いくつかの項目の英訳が付録として収録されており、そのひとつが文書6の「日本誌付録・日本の茶の話」である。

英訳『日本誌』はその後、オランダ語やフランス語、ドイツ語にも訳され、1770年代末にケンベルの原稿に基づくドーム(C.W.Dohm)編集のドイツ語版が出るまで定本の位置を占め続け、ヨーロッパにおける日本学の根本資料となった。茶に関しても、18世紀のヨーロッパの茶論の著者たちはほとんど例外なく、直接、間接にケンベルに依拠している。それは例えば、文書16や文書22など、この『初期文献集』の文書からも容易に確かめられる。

ケンベル研究者、ボダルト=ベイリーの主張によれば、ショイヒツァーもドームも、ケンベルの草稿を当時の社会に受け入れられるように一部省略したり、変更した個所があるという。とくに日本を礼讃し、キリスト教批判ととられかねない個所は削除された可能性もあるらしい。[ボダルト=ベイリー、1994、232-236頁] 近年、ケンベルの手紙など原資料も続々と刊行されているので、研究の一層の進展を期待したい。<sup>(13)</sup>

ただいづれにせよ、18世紀のヨーロッパの読者たちにとって、ショイヒツァーの英訳版『日本誌』は、日本の茶について知る、ほとんど唯一の信頼できる情報源だったことはまちがいない。中国の茶に関してもこの時期までにまだこれほど詳しい叙述はヨーロッパに伝わっていなかったの

<sup>(12)</sup> ケンベルに関しては、B.M. ボダルト=ベイリー『ケンベルと徳川綱吉』(中公新書、1994)、ヨーゼフ・クライナー編『ケンベルのみた日本』(NHK ブックス、1996)などを参照。

<sup>(13)</sup> 例えば、Briefe 1683-1715 / Werke / Engelbert Kaempfer: herausgegeben von Detlef Haberland, Wolfgang Michel, Elisabeth Gössmann; Bd. 2, München: Iudicium, c2001を参照。

<sup>(14)</sup> 今井正訳『日本誌—日本の歴史と紀行—』下巻 霞が関出版 1973参照。

で、中国や日本の茶について知ろうとする者は皆、まずケンペルを頼りにした。このたびの『初期文献集』のなかで、最も広く読まれ、最も影響力の大きかった文書のひとつと言ってよいだろう。なお、ドーム版の日本語訳『日本誌』の中にも「日本の茶の話」が含まれている。<sup>(14)</sup>

文書6の末尾にある図版も、非常に精密で興味深いものである。ケンペルは銅版画師にも細かい指示をして厳密な図版をつくらせようとしたとされており、おそらくこの図版もそういった苦勞の末にできたものと思われる。ケンペルが滞在した1690年代の日本の茶道具について知るうえで貴重な資料となるばかりでなく、ケンペルが何に注目し、何を詳しく描いているか、同時代の読者がこれをどう見たかなど、興味はつきない。

文書7 Short, Thomas, 1690?-1772

*A dissertation upon tea* (1730)

トーマス・ショート

「茶論—多数の新実験により茶の本質と諸性質を説明し、異なる体質の人に及ぼす茶のさまざまな影響を哲学的原理により明らかにする」

文書7は南スコットランド出身の医師トーマス・ショート博士の茶論で、1730年頃ますます人気が高まり、多くの人に飲まれるようになった茶について、正しい知識を伝えようとして出版された。茶の特性を調べるためにショート博士自身がおこなった実験の報告を含んでいること、ヨーロッパに古くからある薬草のセージを推奨しようとしていることなどが特色となっている。

1730年代は前述のとおり、茶が上流市民階級の間にも広く流行し普及した時代で、富裕な商人や貴族たちは、家の内装や家具、食器を整えて、喫茶を楽しむようになっていた。ティー・テーブルの家族団欒図が数多く描かれた時代でもある。[滝口、1996、第5、6章] 茶の急速な普及で、ニセ茶の横行という問題もおこった。

例えばヨークの茶商テューク家には次のような文書が残されていたという。<sup>(15)</sup>

「もし茶の業者が、スロー（サクラ属）や甘草の葉、使った後の茶の葉、その他の木や灌木や草の葉を、茶に似せて染めたり加工したりした場合、またはそのような葉や茶の葉に、テラ・ヤポニカ、砂糖、糖みつ、粘土、ロックウッド（マメ科の小低木）その他のあらゆる混ぜ物や材料を混ぜあわせたり、色を付けたり、しみを付けたり、染めたりした場合、またそのような染めたり加工したりした葉を所有していた場合は、全ての葉を没収され、罰金として10ポンド支払わなければならない。」（1731年の法律）

このような法律文書からも、当時「イギリス産の」ニセ茶がさかんにつくられていたことがわかる。

<sup>(15)</sup> 滝口、1996、158頁および Robert O. Mennell, *Tea: An Historical Sketch*, London 1926 参照。



本物のアジア産の茶とはどのようなものなのか、日常の飲み物として茶を楽しむ層がふえるにつれて、茶についての知識の普及も急務となっていた。

トーマス・ショートは、文書7と文書15(1750)の両方を書いており、それぞれ40歳と60歳ころの著作と思われる。同じ著者が20年を隔てて同じテーマについて書いているわけで、両文書を比較して読むことによる発見は多い。二つの本は内容の上でかなり大きな変化があり、この20年間にイギリスでは茶を取り巻く状況が大きく変わったことが容易に推定できる。文書7には、茶は流行の飲み物ではあるが輸入品なので、できれば在来のセージなどの薬草茶を飲用するほうがよいのではないかと、という考え方が示されているのに対し、文書15では、茶は国民生活に根付き始めていて、商業の面でも大きな役割を果たしており、別の飲み物で代用することは不可能だろうという見方が示されている。[滝口、1996、第三章]

●文書8 Campbell, Duncan (1680?-1730)

*A poem upon tea* (1735)

ダンカン・キャンベル

「茶詩」

文書8はダンカン・キャンベルの茶詩で、茶と女性、酒と男性を結び付けて、茶と酒を対比させながら、茶を讃美する内容となっている。

例えば前書きによれば、女性たちにふさわしい飲み物はミルク・ティーで、女性たちの体質にも、汚れない好みにもあっている。茶は美しく賢明な人たち(女性を指している)にふさわしく[文書8, p.9]、酒(ワイン)は人を酔わせるが(intoxicates)、茶は甘く無邪気でマイルド(sweet, innocent, mild)だ。[文書8, p.10]

このような調子で、茶の方は女性たちの無邪気でかわいらしいおしゃべりをさそい、女性たちの「平和な言葉」the peaceful Language of the Fair [文書8, p.11]をもたらしものとして描かれている。またこの詩では、実際のティー・テーブルでの会話の例、女主人と客たちの問答も再現している。「ホビーになさいますか、グリーンですか、それともミックスがよろしいかしら」[文書8, p.11]といった調子で、かなり類型化されているかもしれないが、1735年当時のお茶の時間をある程度再現していると思われる。

「お茶からは毎日流れ出す、平和と愛と友情が」というような詩行は、陳腐で月並みに聞こえるかもしれない。しかしこの時代、貴賤を問わず、男性たちはお酒を飲んで酔っぱらい、喧嘩や騒ぎを始めるというのが日常茶飯事だった。それに比べてお茶を飲む女性たちは何と賢く穏やかで、お茶のテーブルは何となごやかなのだろう。そのような茶への素朴な讃美の気持ちも、この詩の背後にはある。またこの詩は、外来の飲み物である茶がすでに1730年代に女性の間で人気の飲み物として定着し始めていて、女性の優しさや穏やかさと結びつく「平和と愛と友情の飲み物」という性格づけをなされていたことを示している。その点でも重要な作品であると言える。

●文書 9 Writing master, J.B.

*In praise of tea, A poem* (1736)

文筆家 J.B.

「茶を讃める詩—グレート・ブリテンの淑女たちに捧ぐ」

文書 9 は女性と茶を賞讃する内容の短い詩で、カンタベリーで出版されている。著者は文筆家で文学にも関心のある人らしいが、どんな人物かははっきりとはわからない。前書きで、当時流行していたデフォアの『ロビンソン・クルーソー』（1719）や『モル・フランダース』（1722）などをこき下ろしている。J.B. 氏が言うには、これらの話はでっちあげた話（feigned stories）で、人を面白がらせるけれど、人間の屑のような人たちを除いては本当にこれらの作品を賞讃する人はいない。それよりも、自分の詩を読んで、もし一人でも美しい乙女が喜んでくれるなら、それ以上に嬉しいことはない。

この詩の中では、茶は楽しくて無邪気な食事の飲み物であり身体に良く、男性に比べて鋭い感覚を持ち、柔軟で学ぶ力のある女性たちにふさわしい飲み物として描かれている。茶碗を表す言葉として、ディッシュ（dish）が使われている。酒やコーヒーとの対比も見られ、この時期の茶の流行ぶりをうかがわせる詩であるといえる。

●文書 10 Anon.

*Tea, a poem* (1743)

著者不詳

「茶詩」

これも作者不詳の茶詩で、茶を褒め讃える内容になっている。文書 9 と比べると、長さはかなり長く、出版は 1743 年という時期で、30 年代よりさらに茶の流行は進んでいる。どんな表現が使われているかを、細かく見てゆくと面白い。例えば「豊かなアジア」（wealthy Asia）の産物である茶は、中国では玉座についているけれど、ヨーロッパの娘たちもその評判を聞いて茶の信奉者になり、今では神々の飲み物であるネクターさえうらやましく思わない。茶こそ「楽しくて、役に立つ」飲み物であり、「最上のハーブ」なのだから。

茶は快活で優雅な飲み物としてとらえられていて、茶以前のロースト・ビーフやトーストとエールの朝食を食べていた昔のレディーたちのことを少し茶化して書いている。茶は若返りの力、舌を強化させる力をもっていて、茶を飲むと 50 歳の御婦人が 15 歳の少女のようにおしゃべりをするという一節もある。[文書 10, p. 6]

全体としてやや大げさで理屈っぽく気取ったところも感じられる。しかし茶道具や茶会の女性たちの会話などかなり具体的な描写もあり、当時の茶の流行ぶりや、女性たちの生活について考える材料を提供してくれる詩と言って良いだろう。

●文書11 Mason, Simon

The good and bad effects of tea consider'd (1745)

サイモン・メイソン

「茶の効用と弊害についての考察」

文書11は、タイトルのとおり、茶の効用と弊害についての考察になっているが、どちらかといえば、著者は茶の弊害を危惧する立場に傾いている。とくに、貧しい階層の人々までが茶を飲むようになってしまって、朝食と午後のお茶と一日2回茶を飲む習慣が一般化していることを、メイソンは嘆いている。わが家の「婆や」まで「一日2回は私のお茶を飲まなくちゃ」なんて言うんだから。〔…my Gammer must have her Tea twice a-day〕〔文書11, p.2〕貧しい階層の人々にとっては、喫茶の習慣は時間的にも経済的にも失うことの多いものだという考え方は、このあとも多くの著者が主張することになる。例えば『初期文献集』の中では、文書14のウェスレー、文書16のハンウェイなどに顕著に見られる。

メイソンの場合は、茶の肯定的な面も挙げているが、できれば外来の茶よりもセージのような在来ハーブを川いることを勧めている。例えば「我がイギリス産の、身体に良いセージ」our wholesome English Productと「洗練されて優雅なインド産の茶」polite, genteel Indian Teaという言葉があり、前者の方が好ましいと主張している。〔文書11, p.50〕

1745年当時、すでにかなり貧しい層にも喫茶が流行し、それを批判する説も出始めていたことを示す文書であり、約10年後のハンウェイの先駆けとみることもできる。前半には茶に関する基礎知識のまとめがあり、茶の種類やさまざまな国の飲み方、パウリ、ケンペル、ショートなど、これまでの茶論の著者たちの茶に関する意見なども集められている。

お茶好きの「お上品」な人々からの反発をある程度予想し、予防線をはりながらも、メイソンは自分の説を繰り返す。「女中たちまで真似をして流行に遅れまいと異国の珍しい飲み物に手を出すのは、時間と経済の無駄であり、健康にも害を及ぼしかねない。」とくに「午後のお茶」は噂話ばかりの会合となりやすく、「増大する悪習」growing evilとして厳しく批判されている。〔文書11, p.52〕

●文書12 Surgeon, J.N.

Remarks on Mr. Mason's treatise upon tea (1745)

外科医 J.N.

「メイソン氏の茶論について」

文書12は、文書11のメイソンの茶論に対する批評で、著者自身の茶に関する見解も示されている。著者の外科医 J. N. は文書11に対してかなり手厳しく、メイソン氏は医者や専門家ではなく、誰にでもわかりきったことをもっともらしく書いているだけだと述べている。メイソンの本はこれまでの茶論の著者たちの意見をまとめたものにすぎない、というのが外科医 J.N. による批判の中

心で、メイソンの本から引用しつつ、反論している。

ただし、茶に対する見解という点では、メイソンと J.N. の立場はそれほど隔たっているわけではない。J.N. もまた茶の弊害を心配している点では、メイソンと変わらない。

J.N. は、茶を「異国の葉」exotic Leaf ととらえ、よい香り、美味しい味の「贅沢品」である事を認めながらも、これの飲みすぎは女性たちの健康を害するのではないかという懸念を表明している。頑健な体質の人たちには大丈夫かもしれない。また茶の種類の中ではハイソンが最も害が少ないと思われる。しかしできれば、「異国の葉」ではなく、イギリス産のセージやバームなどを用いたほうが良い。これが J.N. の意見だった。

文書 12 は、文書 11 とともに、1745 年当時の茶に対するイギリス社会の反応をよく表わしている。いずれも茶を全面的に否定するわけではないが、あまりにもアジア産の茶の人気が高いため、国産のハーブの見直しを訴えている。二つの文書は、文書 16 のハンウェイほど過激ではないが、18 世紀半ばの反茶論の初期の論調を代表するものとなっている。文面からは、著者の主張の背後に、当時のイギリス社会における茶の流行ぶりが如実にうかがわれる。特に女性たちの間で茶が流行していること、朝食と午後一日 2 回は必ずお茶を飲むという習慣が一般化して国民全体に広がりそうな情勢だったことなど、社会史の資料としても読み取れることは多い。

（後半に続く）



分野：英国文化・英文学研究（18世紀） 英国生活・社会経済史 東西交流史 比較文化

# 茶の文化史

—英国初期文献集成— 全5巻（復刻版）+別冊

A COLLECTION OF EARLY ENGLISH BOOKS ON TEA

監修：島田孝右（専修大学教授）

編集および解説（別冊・日本語）：滝口明子（東京外国語大学非常勤講師）

- 英国食文化に革命的影響を与え、社会現象ともなった「茶」  
—この東洋からの異文化への英国人の拒絶と受容の歴史—
- 17-18世紀の稀覯「茶書」から読み解く英国文化史



Eureka Press

(図1：パンフレット表紙)



## ● 予定収録明細 ●

## VOL. 1: (c.422 pp)

Anon. [Chamberlayne, John]

The natural history of coffee, thee, chocolate, tobacco; with a tract of elder and juniper-berries, showing how useful they may be in our coffee-houses: ans also the way of making M U M, with some remarks upon that liquor, London, 1682, 40pp

Dufour, Sylvestre

The manner of making coffee, tea, and chocolate. As it is used in most parts of Europe, Asia, Africa, and America. With their virtues. Newly done out of French and Spanish., translated by John Chamberlayne, London, 1685, 126pp

Ovington, John

An essay upon the nature and qualities of tea, London, 1699, 46pp

Tate, Nahum

A poem upon tea: with a discourse on its sov'rain virtues; and directions in the use of it for health. Collected from treatises of eminent physicians upon that subject. Also a preface concerning beau-criticism, London, 1702, 62pp

Anon.

An essay upon the nature, use, and abuse, of tea in a letter to a lady; with an account of its mechanical operation, London, 1722, 63pp

Anon.[Physician]

An essay on the use and abuse of tea, Being a mechanical account of its action upon human bodies. With an attempt towards adjusting the difference between perspiration and sweat, London, 1725, 63pp

Kaempfer, Engelbert

The appendix to the history of Japan, Appendix, London, 1727, 22pp

## VOL. 2: (c.480 pp)

Short, Thomas A dissertation upon tea, explaining its nature and properties by many new experiments; and demonstrating from philosophical principles, the various effects it has on different constitutions, London, 1730, 123pp

Campbell, Duncan

A poem upon tea. Wherein its antiquity, its several virtues and influences are set forth; and the wisdom of the sober sex commended in chusing to mild a liquor for their entertainments. Likewise, the reason why the ladies protest against all imposing liquors..., also, the objections against tea, answered; the complaint of the fair sex redress'd, and the best way of proceeding in love-affairs... London, 1735, 31pp

Writing-master, J. B.

In praise of tea, A poem. Dedicated to the ladies of Great Britain Canterbury, 1736, 11pp

Anon.

Tea, a poem. In three cantos, London, 1743, 49pp

Mason, Simon

The good and bad effects of tea consider'd. Wherein are exhibited, the physical virtues of tea... To which are subjoined, some considerations on afternoon tea-drinking, and many subsequent evils attending it; with a persuasive to the use of our own wholesome product, sage, etc., London, 1745, 53pp

Surgeon, J. N.

Remarks on Mr. Mason's treatise upon tea: subsequent to which, is exhibited a true portrait of the qualities and effects of that liquor London, 1745, 24pp

Pualli, Simon

A treatise on tobacco, tea coffee, and chocolate..., translated by Dr. James, London, 1746, 173pp

Wesley, John

A letter to a friend, concerning tea, 2nd ed., Bristol, 1749, 16pp

## VOL. 3: (c.435pp)

Short, Thomas

Discourses on tea, sugar, milk, made-wines, spritis, punch, tobacco, etc., with plain and useful rules for gouty people, London, 1750, 435pp

## VOL. 4: (c.382pp)

Hanway, Jonas

An essay on tea, considered as pernicious to health, obstructing industry, and impoverishing the nation: with an account of its growth, and great consumption in these kingdoms,... from A journal of eight days journey from Portsmouth to Kingston upon Thames, c (pp.203-361), London, 1756, 165pp

Johnson, Samuel,

Review on Hanway, from The Literary Magazine; or, Universal Review, No. 13, London, 1757, 4pp

Lettsom, John Coakley

The natural history of the tea-tree, with observations on the medical qualities of tea, and effects of tea-drinking, London, 1772, 64pp

Twining, Richard

Remarks on the report of the East India directors, respecting the sale and prices of tea, London, 1784, 80pp

Twining, Richard

Observations on the tea and window act, and on the tea trade London, 1785, 69pp

## VOL. 5: (c.292pp)

A Friend to the Public

The tea purchaser's guide; or, the lady and gentleman's tea table and useful companion, in the knowledge and choice of teas London, 1785, 52pp

McCalman, Godfrey

A natural, commercial and medicinal treatise on tea. With a concise account of the East India Company - thoughts on its government, Also, an advice as to the use and abuse of tea..., Glasgow, 1787, 128pp

Lettsom, John Coakley

The natural history of the tea-tree, with observations on the medical qualities of tea, and on the effects of tea-drinking., New edition, London, 1799, 112pp



Eureka Press

(有)ユーリカ・プレス

〒560-0026 大阪府豊中市玉井町4-2-8-915

Tel: 06(6844)1811 Fax: 06(6362)6024

e-mail: ky6844@ybb.ne.jp

取り扱い書店:

(図2:パンフレット裏表紙)